

2021年度 自己評価・学校関係者評価

認定こども園 西那須野幼稚園

本園では、教職員に対してチェック方式による自己評価を実施しております。
認定こども園への移行に伴い、2019年度より評価の結果を公表します。

・評価は3段階評価 [達成されている、概ね達成されている、未実施・取り組みが不十分]

評価項目	自己評価	取り組み内容
教育理念や方針の理解 環境構成 教育課程の編成 評価と反省	概ね達成	保育日誌・カリキュラム等 園の理念・方針確認 月の予定・反省 コロナ感染状況に応じた取組
健康と安全への配慮 幼児のみとりと理解 指導とかかわり 保育者同士の協力・連携	達成	視診の強化、体調確認 除菌・消毒 集団ミーティング 避難訓練 年齢に沿った見守り 混合保育、絵画ワークショップ
教師としての能力や適性 良識とマナー 保育の楽しみ・喜び 感性・周りへのアンテナ	達成	教材資材管理 業務効率化の意識 職員会議 主任会議
保護者支援 情報の発信と受信 守秘義務の遵守 クレームへの対応	達成	園だより、集団だより 守秘義務の遵守 送迎時の声掛け 保護者相談
地域の自然 地域とのかかわり 小学校との連携	概ね達成	子育て支援 園庭解放 山林自然観察園
研修・研究への意欲や態度 専門性に関する研修・研究 遊具や教材に関する研修・研究 園の環境に関する研修・研究 自らを高めるための学習	概ね達成	職員研修(園内外、オンライン含む) 研修報告 専門紙の回覧 専門機関との連携



コロナ禍での園生活が続く中、手洗いや消毒、マスクをつけての生活も子ども達が意識してできるようになってきました。3学期は初めて休園・学級閉鎖が続いたので、それまで以上に消毒やマスクの使用を徹底する・体調の確認を行う等の感染対策を心がけるようにしました。

教師同士も密にならないように、打ち合わせや会議を最小限にしましたが、園内研修『保育と絵本・保育とおもちゃ・環境構成』『自園の教育目標と保育』を実施した結果、方針を再認識し、思いを共有する良い時間になりました。その後の保育に活かされたことが保育日誌にも記録されていました。今後も継続していきたいと思えます。また、研修として児童発達支援センターシャロームの保育に加わる中で情報交換をし、子ども理解や教材について話を聞きながら学ぶことができました。

子どもの内なる力を伸ばすものとして、月刊絵本の個人購入をお願いし、保育の中でお話に親しむ時間を大切にしました。持ち帰って各家庭でも親しんでもらえるようにしたので、絵本を通して家庭でのコミュニケーションもより深まるようにと願っています。

遊びについては、感染予防のため、接触が少ないようにコーナーを作ったり、少人数でも遊べる制作遊び等を取り入れましたが、友達同士、話し合いや一緒にやりたいという子が多く、迷うことが多くありました。他にできることを見つけたりして、プラスの面を探す事で保育を進めました。また、外国籍の子どもに分かりやすく日本語を教えること、環境の違うところでも安心できる関わり方をみんなで取り組むことを心がけました。

保護者への対応は、傾聴する姿勢が大切だと思いました。また、保育参観や発表会等が中止となり、園生活での子ども達の姿を見ていただく機会を作れなかったので、少しでも園の様子が伝わるようなエピソードをおたよりに載せるように心がけました。まん延防止措置等や休園・学級閉鎖によりその期間に登園しない園児もいたので、園で行った制作物や聖書物語のぬりえ等を各家庭に配付しました。日本語があまり通じない保護者には、伝えることが難しいこともありました。

長引くコロナ禍により、園生活を十分に経験できない子ども達は、身体面の不器用さなども見られ、伸び悩んでいるように感じて心残りに思います。園での活動だけでなく、家庭でもできることを更に検討していきます。これからも教師同士が子どもについて話し合う時間を大切に、チームで保育していけるような関係を続けていきたいと思えます。





昨年度以上に新型コロナウイルス感染が身近な状況になったが、そのような中にもあっても原点に立ち返る2年目の保育実践がある程度できたと考える。

昨年度に続くこの1年間の私たちの自己評価・学校関係者評価による課題が、ある意味において子どもたちの将来に直結する課題でもあることを再認識し、今年度も学校関係者評価についての研鑽を深め、昨年度の「幼保連携型認定こども園教育・保育要領 自己評価実践園」に加えて、「学校関係者評価実施園」の認証を受けた。これらの経験を保育実践にフィードバックする事が大切と考える。

ところで、こども達が社会で活躍していであろう2045年はAIが人間を超える「シンギュラリティー」と言われている。このコロナ禍で私たちが直面している以上に、子ども達はその時々々の適解を探求して生き、非認知能力と言われる折れない心(レジリエンス)、自己統制力(意思・感情・行動)、価値観の違う人と一緒にやり遂げる力等が求められる。その非認知能力の基礎が、幼児期の遊びや他者との協働による課題解決を通して育まれると言われている。私たちは自己評価や学校関係者評価に基づく更なる保育の質的向上を目指したいと考える。同時に、建学の精神に基づく、他者の心の痛みを感じて共に生きる力を身につける地球市民をも念頭に置き、次年度目標の両輪として掲げたい。

次に自己評価で得られた項目からの課題目標について触れたい、「地域の自然や社会とのかかわり」の項目については、コロナ禍の環境が前提での自己評価であり、次年度は幼小連携を更に深めたい。また、ウイズ・コロナのコミュニティ・インクルージョンの再構築を図りたい。自然との関わりにおいては、感染リスクが少ない附属山林観察園の四季を体験活用していきたい。

「保護者への対応」は概ね達成されているが、コロナ禍、ウクライナ戦争の中で、保護者もこども達も不安の中におかれていることを考えると、親子が安心して子育て出来る働き掛けも求められている。その為には、「研究と研修について」とも関連するが、教師が、カウンセリングや福祉的な学びの研修を通して課題解決型の支援力を高めるとともに、事例を通して他機関と連携した伴走型支援によって、結果的に主な課題の軽減をするということも深めたい。

最後に、外国をルーツとする子どもたちも増えて、多様性を大切にした保育の課題について更に深めたい。





コロナ禍での生活も2年目となり、以前と異なる環境が子どもの成長・発達にどのように反映されるのか、よく調べていきたい。

毎週発行の園誌「しらゆり」には、園児の欠席・健康状況が記載される。「風邪」「熱」「ケガ」「都合」などによる欠席が確認できる他、コロナ感染拡大に伴う「自主休園」が多かった。今後も起こり得る感染拡大の波により、休園の選択をする家庭へのフォローを検討する必要がある。

子育てサロン利用の頃から関わってきた家庭がある。保護者は「この園があったから子どもを育てることができた」と言い、幼稚園、学童クラブと関係をつなげることができている。子どもの成長を通し、その家庭ごと支援できる環境がこの学園にはある。所属の異なる先生同士が見守り合うことは、子どもだけでなく保護者の安定にもつながっている。

各クラスを観察すると、園児もマスクを着用しており、感染予防の意識が定着していることが見受けられた。驚いたのは給食の際、食べるために外したマスクを、おかわりに行く子がちゃんとつけ直していたことだった。ここまでの徹底ぶりは、先生方の努力によるものだと感心すると同時に、感染対策がやはり子ども達の関係にも影響を及ぼしているのではないかと懸念している。この園に限らず、給食時のテーブル配置や仕切りの設置、黙食など、子ども達の関係性はコロナ前とは異なるものになるだろう。命を守ることが最優先であり、感染予防は必要不可欠ではあるが、このような状況が長期化するにつれて保育とのバランスを考えなければならないと思う。

ところで、岩波書店の月刊誌「世界」に連載の「県境の町（吉田千亜）」を読ませていただいた。最後は「しらゆり」からの言葉も引用されており、この園が放射能対策として行ってきた努力を改めて知ることができた。そして、いまのコロナ対策にも共通することが多いと感じている。この連載のように、今回のコロナ対策についても、園で実施したこと、それらの良かった点や反省点の記録は、保育を振り返る上で大切な資料になるだろう。

「しらゆり」に関することと言えば、県外の保育施設での保護者面談で、その内容をいくつか引用させていただいた。ある母親が、夫の転勤で知り合いのいない土地に転居し、一人っ子である我が子に多動の兆候が見られ、様々な要因が重なり、一時的に寝込んでしまった。ようやく体調が戻ったため、面談の際に「しらゆり」で紹介された「今日」という詩をお渡しした。すると、読むなり母親は泣き出してしまった。私はその詩が彼女の心にぴったりと寄り添い、励ますことができたのだと思った。

また、子どもの発達で悩む保護者と面談を行った際、「2つのささやき (DEVIL or ANGEL)」と「リフレーミング辞書」を紹介した。その対比言葉を読んで母親が笑い出した。話を聞くと、言葉がオウム返しだった子どもに最近、「クリスマスにはどっちが欲しい?」と言ってカタログを見せたところ、初めてオウム返しではなく「こっち!」と言って指差したそう。その他にも、「へいわってすてきだね」という詩を保護者にお渡ししたこともあった。

「しらゆり」はそれを読む人の状況によって、時には心に深く刺さることがある。今後も継続し、クラスのことや子ども達のことたくさん書いて欲しい。コロナ禍によって、子育てに限らず全てのことが大きく揺さぶられている。大変な中ではあるが、これを更なる変革の機会と捉えて進んでいただきたい。

今年度は「世界」の他、フレーベル館の月刊誌「保育ナビ」にも園の取組が掲載された。保育をわかりやすく発信することは易しいことではないが、どうすれば伝えるかを考える過程が自己評価につながる。原稿の校正にあたり、発達支援担当、シャローム、学級担任、事務職員と協力して行ったと聞き、嬉しく思った。共に考えることをこれからも大切にしていきたい。

